δῶ「家」と -ον- 幹名詞の単数主格形

松浦高志

1.　はじめに

印欧祖語のある段階では，一般に語末の *-ōn に含まれる *n は脱落して *-ō となっていたと考えられ，すなわち *-on- 幹名詞の単数主格形は *-ō に終わっていたと考えられる．例：古インド語 rā́jā「王」(: rājan-), ラテン語 homō「人間」(< *dʰĝʰemōn, cf. hemonem [Paul. *Fest*. p. 100 Müller]), 古アイルランド語 cú「犬」(< *k̑u̯ō < *k̑u̯ōn). しかしギリシア語では類推により ν が復元されて τέκτων「建築家」(古インド語 tákṣā) のようになった*[1].

ギリシア語では語末の *-m は -ν に変化したから，初期叙事詩中で用いられる δῶ (n.)「家」(*dom-) も類推により *δων となったはずであるが，実際には復元されていない．-ον- 幹名詞の単数主格形では ν が例外なく復元されているから，δῶ で ν が復元されていない理由は不明であり，管見の限りでは説明されていないと思われる．これは *-ōn > *-ō の変化と Stang の法則の順序を考え，*dom-「家」が印欧祖語においても

---

* 脚注に特に記していない箇所を含め，査読者から数々の有益な指摘をいただいたことに感謝申し上げたい．もちろんそれでもなお誤りや不備が残っていれば，すべて私の責任である．

*1 したがって印欧祖語での再構築形を示す時は *-ō(n) のように *n がかっこの中に入れられることがある．以上についてはたとえば Fortson, 70 参照．ギリシア語での ν の復元については Rix, 145; Sihler, 230 などを参照.

中性名詞であったと考えることによって説明できると思われる．

2. 用例と語源

δῶ「家」の用例はホメーロスに 23 例[*2]，ヘーシオドスに 1 例ある[*3]．後者は不変化詞として扱われており，明らかに刷新である[*4]．すなわち ἤλυθες ἡμέτερον δῶ「あなたは私たちの館へ来た」（*Od*. 2.262）のような叙事詩の表現から新たに作り出された形と考えられる．またミュケーナイ・ギリシア語に do-de があり，一般に δωδε を表していると考えられている[*5]．ヘーシオドスの用例が類推による形態であること，またその 1 例を除いてはすべて詩行末に置かれること，またホメーロスの 1 例を除いては単数対格形で現れることを考えあわせると[*6]，初期叙事詩の段階ですでに δῶ は化石化していたと考えられる．したがってこの単語はギリシア祖語から東ギリシア方言祖語へ，そしてミュケーナイ・ギリシア語や初期叙事詩には受け継がれたことは確実であるが，ギリシア祖語から西ギリシア方言祖語に受け継がれたかどうかは定かではない．受け継がれなかったか，あるいは受け継がれたが使われなくなったかのどちらかである．

δῶ は一般に「家」を表す語根名詞と考えられているが，副詞に由来すると考えられることもある[*7]．これはつまり，たとえば ἡμέτερον δῶ はもともと ἡμέτερόνδε と同様に「私たちのところへ」という意味であったが，これが「私たちの家へ」という意味にも取れることから δῶ が「家」の意味をもつに至り，δῶ ἀφνειὸν πέλεται「家は富む」のような主

*2 *LfgrE* s.v. 単数対格の例が 22 例，単数主格が 1 例である．
*3 *Th*. 933: ναίει χρύσεα δῶ「黄金の館に住んでいる」.
*4 Schwyzer, 569 Anm. 5 を見よ.
*5 LSJ *Suppl*.[2] s.v., *DMic*. s.v. 以下の論考より *δωνδε ではないと考えられる．
*6 *Od*. 1.392–3: δῶ ἀφνειὸν πέλεται「家は富む」.
*7 *DELG* s.v., Risch, 359–360.

格の表現が用いられるようになった[*8]，ということである．また *δῶ という副詞が存在した場合，これは古高地ドイツ語の zuo「……へ」，古ザクセン語の tō，英語の to などと比較できるとされる[*9]．ただし以上のような説明は適切でないと思われる． *dō は指示代名詞 *de- の具格である可能性が高いと思われるが[*10]，具格であれば本来，場所を表す名詞であれば「……を通って」などの意味になり，時間であれば「……の時」あるいは「……（するまで）ずっと」の意味になるからである． *dō を用いた時間を表す例としてラテン語の dōnec「……するまで」，quandō「……の時」や古インド語の kadā́「……の時」を挙げることができる．また，以上のような説明ではミュケーナイ・ギリシア語の do-de (= δω -δε)「家へ」はきわめて刷新的な形であって受け入れがたい．したがって *dō で「……へ」の意味になるのは刷新であり，ギリシア語ではそのような刷新は起こらなかったと考えられる．

3. Stang の法則

Stang の法則は一般に「半母音と喉音は後に -m(-) が置かれた場合，同化し，代償延長により前に置かれた母音が延長される」と述べられる[*11]．たとえば *di̯éu̯-m̥ > *di̯émm > *di̯ḗm「空を」は古インド語の dyā́m「神を」や Ζῆν(α)「ゼウスを」，ラテン語の diem「日を」に見られ，*gʷóu̯m̥ > *gʷómm > *gʷṓm「牛を」は古インド語の gā́m やドーリス方言の βῶν に見られる．Stang はこの音韻変化が *gʷóu̯-「牛」と *di̯éu̯-「天」とい

*8 n. 6.

*9 *DELG* ではラテン語の endo「……の中で」やヒッタイト語の anda も比較の対象として挙げられており，ギリシア語の ἔνδον とも比較できるとされているが，もし endo の -do が *dō に由来するとすれば母音が短くなっている理由が不明であるし，ヒッタイト語に andan という異形が存在することの説明ができない．さらに andan は ἔνδον と比較できるから δῶ と endo の語源が同じだと考えることは適切でないと考えられる．Kloekhorst, s.v. anda を見よ．

*10 Watkins, s.v. *de-.

*11 Meier-Brügger, 227–228; Mayrhofer, „Collinges“, 118.

う古い曲用を保存した名詞でしか起こらないことから，印欧祖語の非常に古い時期に起こったとした[*12]．しかし非常に古い時期に *g^wṓm となっていたとしたら，さらに語末の鼻音が脱落して *g^wṓ となっていたと考えられるから，Stang の法則が作用するのは語末の *-ōn で *n が脱落して *-ō となった後だと考えられる．

4. χθών「大地」と χιών「雪」

ギリシア語など，いくつかの子孫言語では *-om- 幹名詞も *-on- 幹に移行している．χθών「大地」（ラテン語 humus と同根）は，印欧祖語では *d^hégȇ^{h}-om- と再構築される[*13]．*d^hégȇ^{h}- はヒッタイト語の tēkan (n.) とトカラ語 A の tkaṃ (f.) によって支持され，ギリシア語で χθ- となるのは *d^h と *ǵ^h が転置されたためである．古インド語では単数主格形は kṣā́s，単数対格形は kṣā́m (RV 1.67.3)[*14]，古アイルランド語では単数主格形は dú (f.?)「場所」(< *dṓm)，単数対格形は don (< *dóm < *dṓm) となる[*15]．語幹は *m で終わっているから（cf. χθαμ-αλός「地面の近くの」，Lat. hum-ilis「低い」[*16]），ギリシア語で -ον- 幹になるのは，εἷς (m.)「1」(< *sen-s < *sem-s)，ἕν (n.)「1」(< *sen < *sem, cf. ὁμός，英語 same「同じ」）と同様に，ある曲用形に *m に由来する *n が含まれるようになったためと考えられる．単数主格形は *ǵ^{h}d^{h}ṓm > *χθώ となったと考えられるから，これには ν は含まれていない．したがって古インド語や古アイルランド語と同様に単数対格形が *χθώμ > *χθών となり，この ν が他の曲用形に広まったと考えられる．ν が他の曲用形に広まった結果，他の -ον- 幹名詞と曲用型がほぼ同じになるが，しかし単数主

*12 Stang, 295.
*13 *NIL* s.v., *EWAia* i.424–425.
*14 MW s.v. 2. kshám-.
*15 *DIL* s.vv. dú, 1 don.
*16 この 2 例は母音の対応に説明を要するが，語末が *m で終わっていたことを示す例であるとの指摘を査読者の 1 人からいただいた．

格形 *χθώ と単数対格形 *χθών のみが異なる．単数主格形に類推により ν を復元する一方で，単数対格形は単数主格形と同じになるのを避けるため，他の -ον- 幹名詞からの類推で χθόνα となったと考えられる．

χιών, -όνος (f.)「雪」においても χθών と同様のことが起こっていたと考えられる．ラテン語 hiems, hiemis (f.)「冬」，古アイルランド語 gaim「冬」などから印欧祖語では *ĝʰéi̯-om- と再構築される*17．単数対格形は印欧祖語の段階で *ĝʰéi̯-om-m̥ > *ĝʰéi̯ōm となっていた可能性があり*18，これは新アヴェスター語の ziiąm が示していると思われる．すなわちギリシア語では単数主格形が *χιώ，単数対格形が *χιών だったが，後者に含まれる ν が他の曲用形に広まり，単数主格形に類推により ν を復元する一方で, 単数対格形は類推により χιόνα となったと考えられる．

5. *dom-「家」

δῶ (n.)「家」は δεσπότης「主人」(< *déms-pót-)，古インド語 dám-pati-「家の主人」(< *déms-pót-i-)，アルメニア語 town などから語根は *dom- と再構築でき，単数主格は *dṓ (< *dṓm)，単数属格は *dém-s となる語根固定型（acrostatic）の名詞と考えられる*19．

中性名詞が単数主格と単数対格で延長 o 階梯となることがあり得るかどうか疑わしく，そのため，男性名詞または女性名詞と考えられることが多い*20．まず古アヴェスター語では dam-「家」は男性名詞である*21．

---

*17 *NIL* s.v.

*18 *NIL* s.v. Anm. 1.

*19 Schindler, 4–5. *dom- と同じく語根固定型の曲用となる例としてヒッタイト語の wāt-ar (nom./acc. sg. n., < *u̯ód-r̥), wit-en-aš (gen. sg., < *u̯éd-n̥-s), wet-en-i (dat. sg.)「水」があると査読者の 1 人から指摘をいただいた．

*20 *dom- が単数主格と単数対格で延長 o 階梯となるのは，Szemerényi の法則が類推的に適用されたためであるとの指摘を査読者の 1 人からいただいた．すなわち有生（animate）名詞（つまり男性名詞または女性名詞）の語幹が鼻音または流音に終わっている場合，単数主格形の語尾 *-s が付されると，まず *-s が鼻音・流音に同化され，さらに代償延長により語幹末の鼻音・流音が失われる代わりにその前の母音が延長される（e.g. *ph$_2$ter-s > *ph$_2$ter-r > *ph$_2$t-ēr「父」）という現象が，単数

ラテン語の domus (f.)「家」の単数属格形は，初期ラテン語では domī が普通である一方，古典ラテン語では domūs が普通であるから，domus はもともと第 2 曲用と第 4 曲用の両方を行っていたが，次第に第 2 曲用は用いられなくなり，第 4 曲用に移行していったと考えられる．おそらくこれは普通名詞においては，木の名前を除いて第 2 曲用名詞が女性であることがまれであるためである[*22]．したがって *dom- は本来女性名詞であった可能性がある．

しかし *dom- が男性名詞あるいは女性名詞であったとすれば，単数主格形は *m の脱落により *dṓ (< *dṓm) となる一方，単数対格形は χθών「大地」と χιών「雪」の場合のように *dṓm > *δῶν となったと考えられるから，ギリシア語でどちらも δῶ となることが説明できない．古インド語でも dám- は中性名詞として扱われていることを考えれば，むしろギリシア語と古インド語が印欧祖語での性を引き継いでいると考えたほうがよい[*23]．いくつかの子孫言語で男性名詞または女性名詞として扱われるようになったのは，中性名詞が単数主格と単数対格で延長 o 階梯となるのが珍しかったためだと考えられる．たとえばラテン語では humus「大地」，hiems「冬」はどちらも女性であるから *dom- も女性と考えられたのであろう．古アヴェスター語では zyam-「冬」は男性名詞であるから *dam- が男性名詞であっても不思議ではない．

主格形で *-s を用いない *dom- などの無生（inanimate）名詞（つまり中性名詞）であっても，単数主格・対格であることを示すために広がった，ということである．またその例として ἧπαρ (n.)「肝臓，肝」，Avest. yākarə (n.)「肝臓，肝」や ὕδωρ (n.)「水」があるという指摘もいただいた．ただし前者に関しては母音が延長されない Lat. iecur (n.) や古インド語の yákr̥t (n.) があり，さらに検討が必要と思われる．また確かに Szemerényi の法則とその類推的な適用によりさまざまな現象が説明できるが，*dom- がその例に当たるかということに関して私は懐疑的であり，今後の検討課題としたい．

*21 Beekes, *Grammar*, 113–115.

*22 M.Weiss apud de Vaan, s.v. domus. u 幹は古インド語 dámū-nas- (m.)「同室人」などに残っている．

*23 たとえば Beekes, *Introduction*, 209 を見よ．

6. 類推による復元と使用頻度

ギリシア語では -οι- 幹名詞は単数主格で *-ōi̯ > -ω となって，*ō に続く *i̯ が消失している．たとえば πειθώ「説得」は単数呼格で πειθοῖ となる．これは古インド語と対応している．たとえば sákh-i-「仲間」は単数主格で sákhā < *sókʷ-h₂-ō < *sókʷ-h₂-ōi̯ (cf. Lat. soc-i-us) となるのに対して単数呼格は sákhe < *sókʷ-h₂-oi̯ となる．ギリシア語では -ον- 幹名詞とは異なり，単数主格形で ι が復元されていない．類推がどのような場合に働き，どのような場合に働かないかを一般的に述べることは難しいが，この場合は容易であると考えられる．使用頻度がまったく異なるからである．すなわち -ον- 幹名詞は多数存在する一方で -οι- 幹名詞はわずかであり，抽象名詞や固有名詞に限られることから類推が働かなかったものと考えられる[*24]．δῶ も同様で，他の -ον- 幹名詞とは異なり，中性名詞であり，主格形と対格形がもともと同じであったため，類推が働かなかったものと考えられる．

また，そもそも δῶ の使用頻度が低かったことも類推を働かせなかった原因の一つと考えられる．δῶμα「家」は -μα (< *-mn̥-) に終わる中性名詞の中では特異な存在である．-μα (< *-mn̥-) に終わる中性名詞を作るとき，動詞から派生させるならば一般に零階梯または e 階梯を用いる[*25]．したがって δῶμα が δέμω「建てる」に由来するとは考えられず，δῶ に由来すると考えなければならない[*26]．*δομμα が音韻変化により δῶμα となるということはあり得ないと考えられるから，δῶ に直接 -μα が付されたと考えるほかないように思われる[*27]．語根名詞 *dom- が中性名詞であって，単数主格と単数対格がきわめて早い時期から *dṓm >

[*24] Buck and Petersen は -οι- 幹名詞を約 80，-ον- 幹名詞を約 1600（ただし -ων- 幹名詞も含む）としている（Buck and Petersen, xv–xvi, 24–25, 251–260）.

[*25] Balles, 171.

[*26] δῶ, δῶμα· οἴκημα (Hsch.).

[*27] *pace* Szemerényi, 220–221.

*dṓ となっていたという特異性を考えれば，*dō- という語幹が作り出されていた可能性は高いと考えられる．いずれにせよ δῶμα はいったん作り出された後はよく用いられるようになった．すでに初期叙事詩の時代できわめてよく用いられているから[*28]，δῶμα は δῶ に取って代わったと言える．

δῶ の曲アクセントは明らかに本来のものではない．δῶμα からの類推であると考えられる．

したがって以上の変化をまとめると次のようになる．*-on- 幹名詞と *-om- 幹名詞では，まず語末の *-ō- に続く鼻音と *i̯ が脱落し，次に Stang の法則が作用した．それと同じ時期に *d^{h}(e)ĝ^{h}om-m > *d^{h}(e)ĝ^{h}ōm, *ĝ^{h}éi̯-om-m > *ĝ^{h}éi̯ōm の変化も起こった．ギリシア語では類推により単数主格形で ν が復元されることになるが，χθών と χιών では単数主格形と単数対格形が同じになってしまうため，他の -ον- 幹名詞からの類推によりどちらも単数対格形が -όνα となった．一方でギリシア語では中性名詞 *dṓ は曲用が不便であったので，それから派生した δῶμα がもっぱら用いられるようになっており[*29]，また単数主格形と単数対格形はもともと同じであったため類推が働かず，ν が復元されなかった．*dṓ は叙事詩の中に化石化して残り，δῶμα からの類推で曲アクセントになった．

[*28] *LfgrE* s.v.

[*29] 査読者の 1 名から，この説明ではドーリス方言などが無視されている，との指摘をいただいた．LSJ s.v. にあるように，δῶμα は確かにもっぱら韻文で用いられる単語であり，特に初期叙事詩やそれを模倣した作品でよく用いられている．実際にドーリス方言碑文に関しても韻文の例が多い（*ICret*. I.8.33.3, II.19.7.5 et al.）．しかしこれらの韻文体ドーリス方言碑文の用例や，散文体ドーリス方言碑文の δωματίτης「家に属する」の用例（*IG* V 1.497, 1.589.8–9, 1.608.4 et al.），アイオリス方言やドーリス方言を用いる詩人の δῶμα の用例（e.g. Alc. 48.15 LP, Pi. *O*. 1.42, *P*. 4.53）を考え合わせれば，この説明をたとえば東ギリシア方言に限定する必要はないだろう．

凡例

DELG Chantraine, *Dictionnaire étymologique de la language grecque.*

DIL *Dictionary of the Irish Language.*

DMic. Aura Jorro (red.), *Diccionario Micénico.*

EWAia Mayrhofer (Hg.), *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen.*

LfgrE Snell (Hg.), *Lexikon des frühgriechischen Epos.*

LSJ Liddell, Scott, and Jones (eds), *Lexicon.*

LSJ *Suppl.*^{2} Glare (ed.), *Greek-English Lexicon: Revised Supplement.*

MW Monier-Williams, *Dictionary.*

NIL Wodtko, Irslinger, und Schneider (Hgg.), *Nomina im indogermanischen Lexikon.*

作家・作品の略号は LSJ; LSJ *Suppl.*^{2}; *OLD*; MW, xxxiii–xxxiv に従い, 雑誌略号は *L'année philologique* に従った. その他一般の略号は LSJ に従った.

参考文献

Aura Jorro, F. (red.), *Diccionario Micénico* (Madrid, 1985–93).

Balles, I., *Latein, Altgriechisch*, Nominale Wortbildung des Indogermanischen in Grundzügen, hrsg. R. Lühr (Hamburg, 2008).

Beekes, R. S. P., *A Grammar of Gatha-Avestan* (Leiden, 1988).

——— (ed.), *Etymological Dictionary of Greek* (Leiden, 2010).

——— *Comparative Indo-European Linguistics: An Introduction*^{2}, rev. M. de Vaan (Amsterdam, 2011).

Buck, C. D. and Petersen, W. (eds), *A Reverse Index of Greek Nouns and Adjectives* (Chicago, 1945).

Chantraine, P., *Dictionnaire étymologique de la language grecque* (Paris, 1968–80).

Fortson, B. W., IV, *Indo-European Language and Culture: An Introduction*[2] (Chichester, 2010).

Glare, P. G. W. (ed.), *Oxford Latin Dictionary* (Oxford, 1968–82).

——— (ed.), *Greek-English Lexicon: Revised Supplement* (Oxford, 1996).

Kloekhorst, A., *Etymological Dictionary of the Hittite Inherited Lexicon* (Leiden, 2008).

Liddell, H. G., Scott, R., and Jones, H. S. (eds), *A Greek-English Lexicon*[9] (Oxford, 1940).

Mayrhofer, M. (Hg.), *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen* (Heidelberg, 1992–2001).

——— „Zu Collinges ‚Laws of Indo-European'. Ergänzendes und Kritisches", *Sprache* 45 (2005), 110–133.

Meier-Brügger, M., *Indogermanische Sprachwissenschaft*[9] (Berlin, 2010).

Monier-Williams, M. (ed.), *A Sanskrit-English Dictionary*[2] (Oxford, 1899).

Risch, E., *Wortbildung der homerischen Sprache*[2] (Berlin, 1974).

Rix, H., *Historische Grammatik des Griechischen* (Darmstadt, 1976).

Schindler, J., « L'apophonie des thèmes indo-européens en -r/n », *BSL* 70 (1975), 1–10.

Schwyzer, E., *Griechische Grammatik* (München, 1939).

Sihler, A. L., *New Comparative Grammar of Greek and Latin* (Oxford, 1995).

Snell, B. (Hg.), *Lexikon des frühgriechischen Epos* (Göttingen, 1955–2010).

Szemerényi, O., 'Etyma Graeca IV (22–29): Homerica et Mycenaica', *SMEA* 20 (1979), 207–226.

de Vaan, M. (ed.), *Etymological Dictionary of Latin and the other Italic Languages* (Leiden, 2008).

Watkins, C., *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*[3]

(Boston, 2011).

Wodtko, D. S., Irslinger, B., und Schneider, C. (Hgg.), *Nomina im indogermanischen Lexikon* (Heidelberg, 2008).

Dictionary of the Irish Language (Dublin, 1913–76).